

(法人の作るページ)  
2019年の「第12回天保山まつり」写真館

菱垣廻船(1/3)のまちなかパレードとともに



編集後記：港まちづくりタイムズ第6号は、港区・大正区のまちづくりについて、市大生によるベイエリア都市の可能性調査研究報告、第12回天保山まつり記録についてなどをご報告しました。

★本タイムズのバックナンバーは（一社）ホームページ <http://minatomachi-o.jp/> をご覧ください。

港まちづくりタイムズ第6号 発行者：産官学連携会議「港区CRテーブル（港区役所、（一社）港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」「大正区CRテーブル（大正区役所、（一社）港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」、発行日：2020年2月25日、編集事務局：（一社）港まちづくり協議会大阪。

# 港まちづくりタイムズ 第6号

## 特集（調査研究） わたしたちの考える 素敵なベイエリア都市 をめざして



発行者：産官学連携会議「港区CRテーブル（港区、（一社）港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」、「大正区CRテーブル（大正区、（一社）港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」、発行日：2020年2月25日 編集事務局：（一社）港まちづくり協議会大阪（大阪市港区築港3-7-15 港振興ビル 206A 06-6572-0017）



**大正区からみたまちづくりの挨拶**

「新たな水辺の賑わい創出へ インナーベイエリアからベイエリアへ」 平成27年から大正区役所が取り組んでいる尻無川河川広場の活用事業として、令和2年1月に、「TUGBOAT TAISHO」が一次オープンを迎えました。まずは、バリエーション豊かな飲食店が軒を重ねるブーラー、台船レストランなどが開業し、水辺空間を存分に楽しめる施設となっています。今後も様々な施設が順次開設していく予定です。また、4月からは舟運事業を開始し、ベイエリアと連携することで、大正区の新たな魅力が発揮できるとともに、インナーベイエリアが活性化する起點としても期待しています。（大正区 稲垣）

2020年1月17日11時から港区役所にて、両区の産官学連携会議（CRテーブル）を開催、学生と両区の行政担当者、筋原章博 港区長との活発な議論がおこなわれました。

今年度で5年目を迎えた港区産官学連携会議。この1年は大阪市大の学生の皆さん、港区の街中に飛び込み、船、吹奏楽、社会実験イベントはじめ様々なアーバマで研究を進めてきました。港区は菱垣廻船の時代から人・物、公園・商店街の新たな活性化という成果を生み出しています。私の母校大阪市大の後輩の皆さんと一緒にまちづくりが出来る事は大きな喜びです。大阪万博に続く素晴らしい未来へ、共に進んでいきましょう！

（港区長 筋原章博）

# 水辺景観と回遊都市！

## 「大阪ベイエリアの見どころを自転車でまわる」調査報告（松井歩美）



大正駅を下りて、自転車が生活の要である大正区一港区には、自転車だからこそ行ける見どころや体験がたくさんあります。そこで、大阪ベイエリアを余すところなく楽しむために、自転車での観光におすすめのスポットをシェアサイクルで調査してきました。まずは大正駅を降り、京セラドーム近くの川沿いを走ります。道中にはアーティスティックな建物や水辺らしい風景がつき、目で見ても、写真を撮っても楽しいです。ヨリドコ大正メイキン つづいて「ヨリドコ大正メイキン」へ足を運びました。長屋を改装した建物は、アトリエ・住居・店舗が一体となっており、木のぬくもりとレトロな雰囲気が感じられます。週末限定でアトリエショップとしてお店を開いており、革小物や布製品、手描きイラストの靴（スリッポン）など、アトリエで活躍する作家さんの作品を購入することができます。旅の記念に、他にはないお土産を買うにもぴったりの必見スポットです。なみはや大橋 大正区と港区を結ぶ「なみはや大橋」は、車だけでなく自転車でも渡れることをご存じでしょうか。大橋の反り立つような急勾配はまさに「ベタ踏み橋」と言っても過言でないスケールで、臨むには心構えが必要です。しかし、登り切ったときの爽快感は格別！ 高さ45mのながめから、ベイエリアを一望できるのはまさに挑戦した人だけの特権です。十分な広さの歩道があり、自転車を止めてゆっくりと景観を楽しむことができます。千歳渡し舟 大正区一港区の対岸を結ぶのは橋だけではありません。渡し舟もぜひ体験して欲しい移動の一つです。渡し舟は自転車も乗せることができます。シェアサイクルの途中でも利用することができます。なかでも千歳渡し舟は千歳大橋の真近を通り、船上からは、なみはや大橋や南港大橋、天保山マーケットプレイスの観覧車、天気が良ければあべのハルカスが見えます。料金が無料なところも渡し舟の嬉しいポイントです。西波止場 港区天保山の西波止場に到着しました。調査でレンタルしたHello cyclingのシェアサイクル自転車は、ステーションであれば全国どこでも返却することができます。今回は西波止場のステーションに返却します。また、この日は大阪港のシャトル船「キャプテンライン」による「船上ほろ酔いクルーズ」が行われていました。クルーズは、プロの演奏家によるジャズの生ライブを聞きながら、大阪港を夕焼けから夜景まで堪能することができます。いかがでしたか？ 自転車での見どころいっぱいの大阪ベイエリア。観光の際はぜひ参考にしてみてくださいね。



# 海と船の文化都市!( 菱垣廻船 )

「菱垣廻船 (1／1 菱垣廻船写真は、なにわの海の時空館)」調査報告 (坂本翼)

1. 水の都人と街 大阪が天下の台所と呼ばれ日本の大都市の一つに育ったのはまさに水の都であったからと言っても過言ではない。その痕跡が現在の大阪のあちこちに散らばっている。例えば今でも外国人観光客で盛んに賑わっている道頓堀や天満橋のように大阪各地には「堀」や「橋」など水に関連のある地名が多い。中には心斎橋や長堀のように現在は完全に水がなくなってしまって地名だけが残っている地域も多い。そしてこの地名からもわかるようにかつての大坂には堀や川が張り巡らされ、至る所に橋が架かっていた。その数なんと 200 以上。まさに水の都だったのである。そしてこの川や堀は大阪湾という広大な海へと繋がっている。この大阪湾を取り囲むように港町が形成され日本各地ならず世界各地から様々な物資が運び込まれた。これらの物資は港からも陸路をほとんどわざわざ内陸へ運ぶことができた。このかつての発展の証を風化させまいと大阪市と地元は様々な活動をしている。その一つが「天保山まつり」だ。

2. 船と神社と祭りと 港区を中心に周辺地域を盛り上げるために十数年前から続いているお祭り、それが「天保山まつり」である。その名の通り海や港に関連した祭りであり全国から多種多様な船が大阪に集結し乗船することができるなど催し事はたくさんある。中でも一番の目玉は菱垣廻船のパレードだ。このパレードは実際の船が出航する時と同じように大阪湾で活動する船乗りたちを護る住吉大社の分社でお祓いを行ってからスタートする。そして分社から会場まで大規模な交通規制を行い中・高校生のマーチングバンドがコースをリードしながら進んでいく。ゴール地点では帆を大きく張り船上から紅白餅をまく光景が大きな見所である。このパレードで使われている菱垣廻船は実際に運行していたものの 1／3 のサイズである。それでも重さは 4 トン。ではなぜこのパレードが行われるのか。それはまさに菱垣廻船がこの大阪湾を中心に日本全国で活躍していたからだ。

3. 菱垣廻船の過去と未来 そもそも菱垣廻船とはなにか。時は江戸時代にまで遡る。菱垣廻船はその名の通り船体に菱形の柄を施している木造船である。大阪に集められた品物を全国各地へ運ぶ手段として頻繁に利用されていた。大阪平野の北部、西部を流れる安治川、木津川から出航し、瀬戸内海、日本海を通じ各地で品物の積み下ろしを繰り返しながら太平洋を回って再び大阪へと帰ってきた。積荷は酒や油から木綿や紙まで種類は多岐にわたる。江戸へと運ばれなかつた物は当時「下らない物」と呼ばれ現在の「くだらない」の語源はこの時に生まれた。そんな大阪の海の経済を支えた柱の一つの菱垣廻船、現存するものはたった一隻のみである。さらにその一隻は人目につかない場所でひっそりと保管されている。現在復元できる技術者は存在せずこの一隻が正真正銘の最後の一隻となっている。大阪人ですらその存在を知らない者もいる。このまでいいのだろうか。江戸時代は様々な荷物を運び活躍したが令和の時代では菱垣廻船の存在そのものが失われた水都大阪の文化と技術を世界にアピールするためにもう一度活躍してくれるのではないかだろうか。



参考文献 大阪なにわの海の時空館、大阪の盛衰史

# 海と船の文化都市!( 商船学校 )

「商船高等専門学校」調査報告 (田原よし乃)

広島商船高等専門学校をご存知ですか？高等専門学校、通称高専とは中学卒業後 5 年間かけ専門的な技術を学ぶ高等教育機関で、ほとんどは工業技術を学ぶ工業高専ですが、広島商船高専は商船学科、電子制御学科、流通情報工学科を持つ、全国 50 校以上ある高専のうち 5 つしかない。商船業を学べる国立高等専門学校の 1 つなのです。2019 年の天保山まつりではこれら 5 校を含む高専 6 校がそれぞれブースを構え、さらに広島商船高専は広島丸という練習船と共に大阪を訪れていました！(写真上)普段はなかなか見られない海からの景色は圧巻でしたね！日本は輸出入のほぼ 100% が海上輸送によるもので、国内貨物も約 4 割を内航海運が担っています。

● 商船高専ではこのように生活を支える船や海に関わる仕事の扱い手を育てています。商船学科では 5 年半の学校生活で船のスペシャリストとなるため勉強・訓練に励みます。初めの 2 年間は普通科と同じような授業がほとんどですが、3 年次に航海コースが機関コースを選択し、専門的な勉強が始まります。海上で使う英語の専門用語や実際に船に乗つての実習もここからスタートです。勉強以外では長い在学期間を活かし資格取得に励んだり、部活に打ち込んだり、過ごし方は自由自在。専門知識を身につけ自ら考える力を養う学びは、昨今求められている技能とも一致します。卒業後の進路は主に 3 つ。商船会社や港に就職し直接学んだことを活かす道(就職率はなんと 100% !)、公務員となつて陸から商船業を支える道、そして進学いっそく発展的な学習を修める道です。進学も、3 年次編入として大学の学士課程に進学するか、高専に残つて専攻科に進み 2 年間学んだ後学士として大学院に入るか、など多様な選択肢があります。主な学部編入先の例は、神戸大学・海事学科、東京海洋大学、長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学などがあり、大学院進学時は東京大学で学ぶ人もいるそうです！今回広島商船高専が天保山まつりに参加したのは練習船広島丸の清田船長が築港のご出身という縁によるもので、高専を知つてもらいういント「高専フェア」の一環でした。全国の高専が協力するこのイベントは日本各地で開催され、商船高専では乗船ツアーや宿泊体験なども実施しています。



# 商業と集客都市!

「大阪市と港区の挑戦 (商店街とイベントの連携)」調査報告 (田中真帆)

港区で八幡屋商店街と八幡屋公園の連携イベントとして「八幡屋グランピック」が開催された。このイベントは昼と夜の 2 部制になっており、お昼に八幡屋公園で大阪グランピックが行われ、夜には八幡屋商店街でバルが開催される。また、この 2 つの会場は歩いて 5 分圏内と施設が隣接していることが特徴だ。昼のイベントの名前にあるグランピックとはグランピング（グラマラスとキャンピングの造語）とピクニックをミックスさせてつくられた造語である。豊かな自然を肌に感じながらショッピングやごはんを堪能することができる。また、夜のイベントのバルはお酒をメインに飲食ができるバーのこと。今回は昼に行われた八幡屋グランピックと夜に行われた八幡屋バルの人の流れについての調査と大阪市公認で公園でのバーベキューを行った。本来公園でバーベキューすることは禁止されているが今回大阪市港区が規制を緩和したために実現することができた。ちなみに、これは全国でもめずらしい、大阪ではじめての試みである。

● 人の流れの調査方法としては、昼のグランピックのときにアンケートに答えてもらえた夜の八幡屋バルで使える金券を配布することを行った。すると、全部で 50 枚配布したが 5 枚利用してもらえた。つまり 10 人に 1 人がバルに来たことがわかる。広報は天保山祭り時と地元の広報しか行っていないにも関わらずこれだけ多くのお客様が来てくれた。実はこのイベント、2019 年に 2 回開催している。一回目は夏にグランピックと公園バーベキューを開催した。このときは 300 人程度（主催者調べ）しか来なかつたがどのように動けばいいのかが足りないのかを知るいい機会となった。1 回目で足りなかつたものを 2 回目では取り入れたり改善策を練ったりした。その結果、2 回目では 1000 人以上のお客様が訪れた。また、夜のバルでも 1000 人以上のお客様に来てもらえた。1 回目の開催時にやわからぬところや改善点を浮かびあがらせ 2 回目に 1 回目の改善点を役立てたことが成功の鍵なのだと思う。この手法は他の地域産業問題にも応用して生かしていくのではなかろうか。これを八幡屋モデルとして、この八幡屋モデルを生かして盛り上がりを取り戻す商店街が増えているように思う。



# 音楽教育都市!

「市岡高校+港中学校」調査報告 (廣川津喜子)

● 楽しく練習するそのウラに「道場式指導法！？」市岡高校吹奏楽部  
外部指導者 潮見裕章先生

潮見先生は、1998年の冬から市岡高校吹奏楽部の指導を行っている。当時市岡高校で学販営業を行っていた三木楽器の担当者が、学生と潮見先生の仲介役となり、潮見先生は吹奏楽部の指導を行うことになった。指導の中で、潮見先生が大事にしていることは 3 つある。

① 「対ひと」 高校生の部活動として成立することを目指している。聴いていただくのも人、演奏するのも人と人が一緒にやっているからこそ、人と人がイコールになるように、と考えている。これは潮見先生自身が、プロとして、楽団に所属して学んだことである。そのため、市岡高校吹奏楽部での潮見先生は、「指揮者」ではなく「指導者」であり、部員は「うちの子」ではなく「生徒」「学生」である。吹奏楽の世界は、部活動として行き過ぎることも有り得るジャンルであるからこそ、部活動としてあるべき姿を大事にしている。② 「基礎を重んじる」 バンドを育てる上で気を付けていることである。ルーツは小学生から高校生まで空手。通っていた道場で、階段の昇降といった体力づくりに励んだ経験が、自身の演奏、吹奏楽の指導へとつながっている。市岡高校吹奏楽部には、基礎合奏だけを行う日が存在する。まず、生徒たちが各自でチューニングを行い、自分たちの響きを確認する。そして、潮見さんが響きの確認をする。このときの生徒との対話、フィードバックが重要である。「もっとこうしたらしいんじゃない？」と指導することで、自分たちで限界をつくらせない、生徒を伸ばすきっかけをつくっている。吹奏楽は響きの集合体であるため、響きの欠陥がましましさにつながる。だからこそ、生徒たちに基礎にあるたる音づくり、響きづくり、ブレス、発音、頭の中のイメージなどを共有しているのだ。③ 「練習は本番のように、本番は練習のように。」 潮見先生自身がステージに立つときに心がけていることである。練習のときから、お客様のことを想定しながら演奏することで、「他人に聴かせる」意識が芽生えるのだ。以上からわかるように、音楽の感性を磨くための下地を部活動の範囲内で生徒たちに指導している。指導が充実しているだけでなく、潮見先生自身が指導をエンジョイしていることこそが 1 番の秘訣なのではないだろうか。

● 港区の音楽コーディネータ、趣味が「吹奏楽の指導」築港中学校 庄司晴紀先生

港区の中学校・高校の吹奏楽部は、天保山まつりや港区ふれあい音楽会に多く出演している。これらを一手にまとめていたのが庄司先生である。担当教科は技術・家庭科。教員としてのキャリアのスタートは 1982 年、そして定年退職、再任用を経て、今年で教員生活 37 年目である。吹奏楽部の指導もずっと継続してきている。ターニングポイントとなったのは、教員生活 10 年目、董中学校での指導であった。吹奏楽だけでなく、マーチングの指導も始めた。マーチングコンテストにも出場し、教員同士での交流が、指導のノウハウを学ぶきっかけになつたそうだ。マーチングの絵コンテを書くことも教えてもらった。これが、現在港区の吹奏楽部を取りまとめるための技術となっている。以上を経て、13 年前の 2007 年、築港中学校に赴任した。築港中学校は全校生徒の人数が少ない中学校で、吹奏楽ができることから、当初は別の中学校への赴任で苦情処理を提出していたほどだった。しかし、部活に真剣に取り組みだそうとする子どもたちを見て、面倒をみると決めた。子どもたちが頑張り続け、優秀賞を取れるようになった。そして今に至る。今現在部員は 13 名。マーチングにしても最低 15 人は必要なため、人数が少ない。今の課題は人を集めることだそうだ。庄司先生が港区の吹奏楽部を取り仕切ることができる理由は、「絵コンテを描ける」ことにあった。マーチングで培われた生徒や楽器の配置や動線を描く「経験」が今につながっている。

● 港区の音楽教育は 2 人のキーパーソンによって今も発展し続けている。2 人の熱意の延長線上にある吹奏楽の指導と吹奏楽に打ち込みたいと思う学生がいる限り、「吹奏楽のまち、港区」となる日もそう遠くはないだろう。